

①名古屋国際センター 近藤大祐



「子どもたちが何語を話しているのかわからない」。

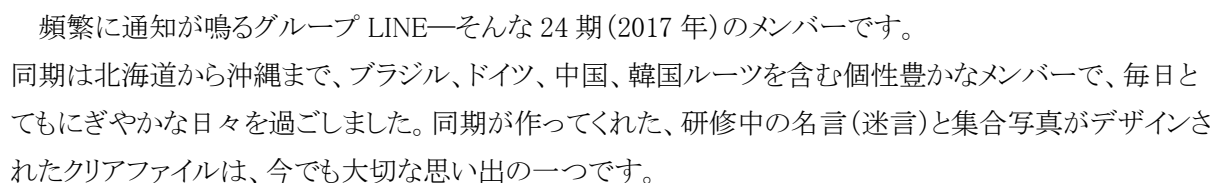
相談者は●●人で夫は▲▲人。子どもは5歳、4歳、3歳、そして相談者は現在妊娠中でもうすぐ出産を迎える。夫とは事実上離婚状態だが、児童手当は夫の銀行口座に入っており、相談者にはお金が入らない。出産を控えているので相談者は現在働くのが難しく、子ども3人と自分の当面の食べ物の確保も心配。子どもは言葉を発するが、●●語や▲▲語ではなく、日本語でもなく何を話しているか相談者もわからない。

上記は10数年前、学生時代に出会ったある家族のお話です。子どもたちの年齢はうろ覚えですが、自分にとって衝撃を受けるとともに問題意識をもつきっかけとなった出来事でした。

当時、活動に携わっていたNPOの代表や大学の恩師がタブマネの認定を受けており、いつかタブマネの研修を受講できたらいいなと思っていたのを覚えています。

その後、静岡県浜松市で多文化共生に関する勉強を2年間したのち、現在の職に就きました。タブマネは令和元年度に研修を受講し、認定いただきました。現在も同じタイミングで受講した方々を中心に情報交換させていただいており、「よし！頑張ろう」という気持ちをいただくとともに、皆さんの実践や経験を日々の取組みに活かしています。

名古屋国際センターでは、高校生向け日本語教室や地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業の立ち上げ、防災啓発事業や災害時外国人支援体制の構築、グローバル人材育成事業、小中学生対象の日本語教室の運営などに携わってきました。現在は、相談窓口の運営を担当して2年が経とうとしています。予測困難で不確実なVUCA時代と言われるなか、外国人住民を取り巻く状況も変化し続けており、寄せられる相談も複雑化しています。どのような困りごとがあるか、活用できる制度やサービスはあるか、解決のためにどのような機関・団体とどのように連携できるのか。模索と学びの毎日を過ごしています。



同期との交流は現在も続いており、担当したセミナーには愛知や京都から仲間が駆けつけてくれました。いつでも LINE や電話で気軽に相談や情報交換できる仲間がいるのは心強いです。

私は協会に入職して以来、国際交流・国際理解に関するイベント・講座・セミナーの企画、多文化共生啓発事業に携わっています。また、外国にルーツを持つ若者グループ「COLORS」の立ち上げ・活動支援、Instagram 開設・運営、協会ポータルサイト「HAMAPO」の新規構築にも取り組んできました。

近年は文化芸術を通じた多文化共生のまちづくりにも力を入れています。2024 年度には文化施設のスタッフを対象に、外国人对応の現状と職員の意識調査を兼ねた研修を企画しました。研修をきっかけに繋がった文化施設職員の方との、新たな協働による企画が始まりそうでワクワクしています。

③伊賀市未来政策部広聴広報課 古川美紀



市職員になって3年目に英語サークルで知りあった人に誘われて、外国人に日本語を教える「伊賀日本語の会」に入りました。「美紀ちゃんだったら、どんな人にも声をかけて話ができそうだから」と声をかけてくださったそうです。私は好奇心でついつい、いろんな人の話を聞きたいと思うので、日本語が話せなくても、なんとなく話しかける、そんな性格が多文化共生に合っていたのだと思います。「違いを知りたい！知ってみたいとわからない。」というだけなんです。

さて、伊賀市役所にはポルトガル語、スペイン語、中国語、ベトナム語、フィリピン語などの通訳がいます。彼女らがいないければサービスが追いつかなくなるほど外国人住民が増えています。これまでに、2度多文化共生の担当になり、外国出身の相談員をまとめる役割や、多文化共生指針、プランの策定などいろいろな経験をさせてもらいました。

タブマネは27期です。JIAMの研修では、いつも全国から集まる受講者らといい刺激や知識を交換できます。仕事やボランティア活動が続けるうえでとても役に立ちました。また、CLAIRの助成を受けて行った事業報告などを見て、他市の職員の方からプラン作りの問い合わせもありました。その時に感じたことは、学びたいという姿勢やインプットも大事ですが、こうやって、アウトプットの機会も与えてくれるというのがタブマネのつながりなんだなあ、と。いろんな質問を受ける中で、自分の経験の中の失敗や改善点に気付くことができました。

地域によって、背景や課題、解決策は違いますが、そういった違いも含めて、共に考えたり、知恵を出してくれる仲間と今後もつながり続けたいと思います。

④(一社)りとりーと 兼子佳恵



私は、2011 年 3 月に発生した東日本大震災の前年に開催された「タブマネ(多文化共生マネージャー研修)第 10 期」の受講生、兼子佳恵と申します。

研修の講義の中では、阪神・淡路大震災の際に多言語での相談窓口を開設するなど、「自助・共助・公助」の大切さを教えてくださった田村太郎氏のお話がとても印象に残っています。

そのご縁もあって、同年 10 月には田村氏を石巻市にお招きし、「災害時におけるネットワークの構築～災害弱者を出さないためには～」と題した講演会を開催いたしました。

そしてそのつながりは、翌年の震災発生時に大きな力となりました。わずか 10 日間の研修期間、しかも中には言葉を交わしたこともないメンバーもいたにもかかわらず、10 期の仲間たちはすぐに支援体制を整え、私たちを力強くサポートしてくれました。

その後は、多くの方々のご支援をいただきながら、「NPO 法人 石巻復興支援ネットワーク(現:やっぺす)」を設立し、復興支援活動を行う傍ら、石巻にお嫁に来られた女性たちに向けて「おうち仕事」や「学びあいの場」、そして地域で活躍する機会を提供してきました。

現在は、3 年前に立ち上げた「一般社団法人りとりーと」で、当時支援に関わってくれた仲間の中から講師として活躍している方もいます。また、石巻市渡波にある「みんなの家」では、アートの時間と世界のごはんを楽しむイベントなども開催し、地域の交流と癒しの場づくりにも取り組んでいます。

あの震災から 15 年を迎える今だからこそ、当時必要だった支援のあり方や、支え合いの大切さをお伝えできると感じています。ぜひ、石巻に足を運んでいただき、今の地域の姿に触れていただけたら幸いです。

⑤可児市国際交流協会 各務眞弓



私は、2009 年に多文化共生マネージャー研修を受けました。このタブマネ研修は、私の中では絶対受けたい研修でした。なぜならタブマネ研修は、ネットワーク作りができる研修であり多様な立場の同期や講師の方々から先進事例を聞け、ネットワークを通じ情報を得ることができるからです。さらに行政へのアプローチの方法などを学びました。

私の所属する NPO 法人可児市国際交流協会は、海外交流、姉妹都市交流事業のない、まちづくりの視点で多文化共生に取り組む団体です。設立当初から地域で起こる外国人についての課題に取り組んできました。私自身も設立からボランティアとして、日本語教室や講座の企画、ブラジル学校の児童生徒への日本語指導などに関わりました。

その他の活動としては、外国人の子どもたちの認可外保育所設立し、1 歳から 12 歳までを対象とした子どもの日本語、子どものポルトガル語、食育などにも取り組んできました。

2008 年 4 月に可児市多文化共生センター開館に伴い、認可外保育所活動を休止しセンター常勤職員になりました。活動休止については、悩みましたが「今は 30 人の子どもたちだが、センターで支援を広げられる」と言われ決意しました。

センター開館してすぐ、リーマンショックの影響を受け、相談対応や支援活動に追われる中、引きこもりの子の対応が始まり、高校進学支援や不就学、不登校、自宅待機の子の対策教室、母語教育、就学前の子どもの指導教室など学齢に合わせた子どもの支援教室を実施し今も継続しています。「場所」ができ「人」が集まり国の委託が取れて、子どもたちの支援教室を広げていく事ができました。長く続けることで支援した子の成長が見られ、またその子たちが親になって関わるということもあります。

なかなか「タブマネ」としての活動は出来ていないかもしれませんが、場と人と資金(行政や資金団体)をつないでいくのもタブマネかなと思っています。

⑥桜花学園大学・名古屋短期大学 塚本江美



タブマネ第 105 号(2009 年修了)の塚本江美です。当時、豊田市国際交流協会のスタッフとして第 7 期の養成講座を受講しました。全国に仲間ができたような、何かあったら助けてもらえる同志と繋がったような感覚、感動を今でも覚えています。そんなご縁から、2011 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震発生直後、NPO 法人多文化共生マネージャー全国協議会が外国人被災者らの支援として立ち上げた「東北地方太平洋沖地震多言語支援センター」の活動支援の一環として、英語への翻訳をささやかながらお手伝いさせていただきました。簡潔かつ分かりやすい翻訳を素早くセンターへ返送する作業はチームワークなしでは不可能でした。

「多文化共生」は私にとり希望と期待を想起させるもので、ワクワクしながら養成講座に参加した当時のことをよく覚えています。一方、世間的にはネガティブな感情や意見を持つ人が少なくなく、特に昨今、激しく顕在化しつつあるように感じています。人間社会の自滅を避ける重要なことだと認識しつつ、理想主義的な響きになっている現状に無力感を覚える今日この頃です。

現在は、豊明市にある桜花学園大学、名古屋短期大学で教員をしていますが、多文化共生を推進する学生サークル「いろはに広げ隊」の顧問をしています。特に留学を経た学生の多文化共生への関心は高いですね。大学連携、地域連携を考えておられる方、あるいはお近くにお越しの際は、是非ご連絡ください！

⑦焼津市 水野建



タブマネ 25 期の水野です。

国際交流と外国人支援を行う部署に配属され、その時に知ったのがタブマネ研修です。何か仕事のヒントが掴めるかとも思い参加しました。同期の方々は全国から集まった精鋭揃いで、特に皆さんの志とコミュニケーション能力の高さにとても驚き、感心しました。

当時、外国人支援業務では「在住外国人生活相談業務」や「外国につながる児童生徒のための進路ガイダンス」の充実などに努めました。

相談業務では必要な言語の通訳の配置に取り組みました。市内在住者数が最も多いフィリピン人の言語にビサヤ語を話す方が多いと知り通訳を配置したところ、今まで言葉の壁に悩んでいた方々が多く相談に訪れました。

進路ガイダンスでは家族で参加してもらい保護者の理解を深めるとともに、進学した先輩の体験談を聞くことで身近に進路について考えていただこうと地元の高校にお願いして生徒や先生方にお越しいただきました。また、参加者の多様な言語に対応できるよう関係機関の協力を得て各国の留学生にも通訳として参加していただきました。開催後に参加者から「役に立った」との感想が寄せられた時は殊に嬉しかったことを覚えています。

タブマネの特徴は皆さんが繋がっていることだと感じます。全国各地の様々な分野で活躍しておられるタブマネとメーリングリストなどで気軽に情報交換できるのは心強い限りです。今後もこうした繋がりを大切にしていきたいと考えています。

⑧静岡県国際交流協会 古橋哉子



2019 年度に修了しました。(公財)静岡県国際交流協会に勤務しています。

私自身は 20 年以上前に入職して以来、留学生事業や情報提供事業等、協会の様々な事業に関わりましたが、特に日本語教育事業を長く担当しました。地域で日本語支援の活動に携わることのできるボランティア育成や中核的な立場で教室運営に携わるコーディネーター養成にかかる企画や運営をしてきました。また、子どもの日本語教育についても協議会や地域教室の立ち上げに関わったり、教育委員会と協働で教員向けの研修を開いたりしました。

静岡県では、高校に進学する外国につながる子どもたちが増加していますが、高校に入学したものの中途退学や進学後の生活が描けず非正規雇用に従事する若者の存在を課題として感じています。高校に入学するだけでなく、卒業して自分で将来を切り拓くことのできる子どもたちを増やすためにはどうしたらよいか、県レベルの国際交流協会が寄与できることは何なのか、思い悩んでいたときにタブマネを受講しました。

タブマネの研修では外国ルーツの若者の自立支援について問題を洗い出す段階から見つめなおす機会になりました。何より、一緒に研修を受講した皆さんと意見交換をしながら夜遅くまで話し合ったことが自分の考えを深めることにつながりました。皆さんそれぞれの立場と環境の中で模索しながら多文化共生の取り組みを進める姿勢には大きな刺激を受けましたし、事業内容だけでなく、国際交流協会の体制やあり方について考える機会ともなりました。また、現在はタブマネになれたことでメーリングリストの有益な情報に触れることができ、全国で工夫に富んだ取り組みを参考にすることができます。

当協会では「自立した若者の輩出」を重点事項に挙げ、高校生年代の若者を対象とし、日本語教育事業やキャリア教育事業に取り組んでいます。私自身は目の前の業務に手一杯に感じることも多いですが、全国で試行錯誤しながら取り組んでいるタブマネのみなさんの存在は頼もしく、困ったときには相談できる仲間がいる、と思えるのは非常に心強いです。

⑨佐賀県国際交流協会 北村浩



2018 年より佐賀県国際交流協会の職員として多文化共生の推進のために業務に携わっています。主な担当としては、地域交流のためのイベントを開催（SPIRA さが国際フェスタ、Sagan world cup 等）、外国ルーツの子どもの日本語学習支援、防災担当として多言語支援センターの訓練などです。中国人の妻と、息子 2 人の 4 人家族でにぎやかな毎日を送っています。

<タブマネになった背景・動機>

私が多文化共生マネージャーを知ったのは入職して半年くらいたったころだったと記憶しています。上司が「タブマネ同期がこんなイベントを実施するんだって」など、タブマネという言葉が頻繁に使っていたことを今でもよく覚えています。その時タブマネって何だろうと非常に興味をもっていました。佐賀県庁の先輩が、タブマネの同期は同士のような存在で様々な情報を交換したり、困ったときは頼れる存在であると聞いてから、私もタブマネの研修に参加したいと強く思うようになりました。JIAM で実施されるタブマネの研修に参加したらタブマネになれると聞き、2021 年に研修に参加し、無事に研修を終えタブマネ 29 期として活動することになりました。

<タブマネとしての活動状況>

2021 年にタブマネになってからの活動としては、2022 年にクレアのオンラインでの防災セミナーの講師を務めさせていただきました。

また、多文化共生の担い手連携促進検討会の委員に推薦していただき 2023～2024 年全国のメンバーと一緒に良い研修を作るために意見交換を行いました。

タブマネの仲間はずっと続きますので、検討されている方がいらっしゃればぜひ仲間になりましょう。

そして、一緒に誰もが住みやすい地域づくりをそれぞれのフィールドで築けていければうれしいです。

⑩スペイン語通訳相談員・社会福祉士 村松紀子



私、実は、資格の取得前(30期 2022年)、タブマネ養成講座で2006年(第2回)から講師を務めてきました。また、受講生の皆さんが、同期や先輩とタブマネつながりで、活動の幅を広げていく姿を見ながら、「私もあの輪の中に入りたい」とも思い続けてきました。退職を前によく資格を取得し、今は“新人タブマネ”として新たな一歩を踏み出しています。

私がタブマネとして目指すのは、外国人支援を「専門職」として確立し、きちんと「仕事」として成り立つ環境を整えることです。30年前、通訳相談員として活動を始めた頃は、外国人支援はボランティアと見なされがちで、専門性が十分に理解されていませんでした。しかし、寄せられる相談は在住外国人の人生に深く関わる重いテーマばかりで、通訳・相談の質を高める必要性を痛感してきました。同時に、燃え尽きて辞めていく仲間をどう引き留めるかも課題でした。

また、相談の背景にある地域にも目を向けて、多文化共生の現場で見えてきた課題を言語化し、次世代の相談員や通訳者の力になる形で残していくことが、今後の私の役割だと感じています。タブマネで学んだ知識を、そのために最大限活かしていきたいと思います。

2023年に兵庫県国際交流協会を退職してからは、(公財)佐賀県国際交流協会の相談顧問、兵庫県外国人相談ネットワーク会議のファシリテーター、自治体国際化協会の地域国際化推進アドバイザー、医療・福祉分野の人材育成など、これまでの経験を活かしながら全国の現場とつながり続けています。タブマネとしてはまだ新人ですが、これからも皆さんと共に、多文化共生の現場をより良くするための学びと実践を続けていきたいと思っています。

⑪かながわ国際交流財団 藤分治紀



2001年から公益財団法人かながわ国際交流財団(KIF)で働いています。多文化共生マネージャー養成研修は2012年に参加させていただきました。そのときまでのKIFにおける10年程の経験の中で、情報誌の発行、講座の開催、ライブラリーの運営、ウェブサイトの運営、助成制度の運営といった業務を担当し、それらを通じて主としてOJT(On the Job Training)で多くのことを学ばせてもらっていました。多文化共生マネージャー(タブマネ)のことは時折耳にしており、まとまった期間に様々な講師から集中して研修を受けることによる効果について関心を持っているところでした。

研修では、全国各地から集まってきた方々と一緒に、全国市町村国際文化研究所(JIAM)という落ち着いた環境の中で様々な課題に取り組みました。偶然のタイミングなのですが、当時、私は自治体国際化協会からの助成プロジェクトの担当をしていましたので、そのプロジェクトにおいて作成したいと思っていたウェブサイトのアイデアもじっくりと温めることができました。今はその運営担当ではありませんが、リニューアルを重ねてそのウェブサイトは続いています。よかったらご覧ください。

「かながわ・こみゆにいてい・ねつとわーく・さいと」(<https://www.kifjp.org/kcns/>)

今、改めて考えてみますと、タブマネになることの受止めは、駅に例えるなら始発駅であったり途中駅であったり人それぞれ。でも、全国から集う仲間と同じ列車に乗って語り合って新しいつながりが生まれたことは共通していたと思います。そのような場で、少し先の未来について考えることができる時間だったように思います。

⑫多文化 LIFE 入倉眞佐子



1990 年からポルトガル語での相談通訳者として自治体や高校で業務を行い、その後、民間団体を立ち上げて活動をしてきました。2020 年から長野県に転居し、長野県箕輪町役場において、外国人相談員兼任で多文化共生コーディネーターという業務に携わってきました。2024 年度から箕輪町役場の業務を離れ、外国ルーツの生徒が 3 分の 1 を占める夜間定時制高校に国語科常勤講師として勤務し、高校現場を少しでも変えていきたいと思い、活動をしています。

また、2023 年に「多文化 LIFE」という民間団体を立ち上げ、2025 年度からは、町からの業務委託を受け、日本語教室の運営や多文化共生事業を担当しています。地域では、無償ボランティアが担うことが多い日本語教室ですが、自治体が責任を持って、予算計上をし、業務を委託され、町と協働して、外国人住民と地域の「架け橋」となるような教室づくりに励んでいます。

<タブマネになった背景・動機>

活動歴は長いのですが、自治体の非正規労働者として相談通訳者の業務を行ってきたので、タブマネ研修に参加することはできませんでした。羨ましいなあと思いながら、横眼で見ていましたが、長野県に転居時に、町役場から許可をもらい、JIAM で実施されたタブマネ養成講座 28 期に参加することができました。しかし、当時、コロナ全盛期でしたので、町から県外出張が認められず、後半の講座は、ひとり、オンライン参加となり、現地での交流ができず、そのことは、本当に心残りでした。

<タブマネとしての活動状況>

タブマネになってからは、その名前を有効に使わせていただき、近隣市町村と「3 町村連携災害時外国人支援サポーター養成講座」「災害多言語支援センター立上げ訓練」「災害時通訳翻訳ボランティア養成講座」などなど、クレアの補助金を申請させていただいて、町と協働して事業を展開することができています。残念ながら、長野県には、多文化共生マネージャーの登録数が少なく県内連携は難しいのですが、28 期の皆さんとは、つながりを持つことができていますので、情報共有をすることができています。小規模地方自治体として、当初は「閉鎖性」の壁にぶつかっていたのですが、少しずつ、あきらめずに、壁に穴をあけ続けようとしてきました。そうすると、それを見てくれていた支援者が現れ、小規模地方自治体であるからこそ、フットワークの軽さを武器にすることができ、いろいろな形で多文化共生事業を展開することができるという魅に気づきました。これからも、楽しみながら、活動を続けていきたいと思っています。